

花熊城跡 花隈町

●「花隈町（はなくまちょう）」の由来



花隈公園のなかに「花隈城跡」という碑が建っている。この碑はもともと1928（昭和3）年に建てられたものだが、阪神・淡路大震災で倒壊したため、元の碑を忠実に模造し復旧したものである。碑の文字は岡山池田家当主の侯爵池田宣政によるものだ。この公園を中心にこのあたり一帯は神戸

を代表する近世城郭、花熊（隈）城があった場所である。花熊城の築城については、1568（永禄11）年に摂津国守護となった和田惟政が築いた説、1574（天正2）年に織田信長の命によって荒木摂津守村重（あらきせつのかみむらしげ）が毛利氏と石山本願寺の海上交通を遮断するために築いたという説があるが、後者の方が有力である。花熊（隈）の名は、神戸の海に面して突き出た台地、つまり「ハナクマ」からきている。

さて、この城の規模はと言えば、岡山大学所蔵の池田文庫「摂津花熊之城図」によれば、城を三つのブロックに分け、中央に本丸・二ノ丸・三ノ丸が、東部に侍屋敷と足軽町が、西部に町家が描かれている。そして、中央部の本丸には天守が備わっており、本丸と二ノ丸・三ノ丸をあわせた周囲には堀がめぐらされており、近世城郭の様相を呈していたのである。こうした城の構えを現在の地形にあてはめてみると、この花熊城は東は神戸生田中学の東の南北の道路、西は花隈町と下山手通8丁目の境の南北の道路、南はJRの高架線、北は兵庫県庁南の東西の筋で囲まれた範囲にあたると思われる。

ところで、この城の運命もそれほど長くはなかった。花熊城は荒木村重支配の下、家老の荒木志摩守元清が管理していたが、村重が織田信長に重大な嫌疑をかけられてしまうというハプニングがおこってしまったのである。これは村重の部下が、ひそかに当時信長と対立していた石山本願寺に物資を供給しているという疑いであった。いったん疑われると、信長の性格上それを覆すのは困難と考えた村重は、毛利氏に援軍を頼み、1578（天正6）年10月に信長に対してとうとう反旗を叛すに至ったのである。その時の様子が『信長公記』に記載されており、天正6年霜月（11月）の末、信長が「滝川左近、惟住五郎左衛門兩人差遣され、……御敵荒木志摩守鼻熊に楯籠り候」とある。信長は最終的に池田信輝、輝政親子に花熊城攻撃を命じ、1580（天正8）年2月に城は陥落するのであった。落城後、信輝はこの城の材料の一部を使って兵庫城を築き、一部の石は大坂城を築くときに運ばれたという。

場所：神戸市中央区花隈町1 花隈公園内

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著